

中国雲南省の省都昆明からさらに数百キロ、臨沧(リンサン)の街角。小さな食堂。一日の仕事を終え、夕食を取っていた時のことだった。ラジオから聞き覚えのある懐かしい曲が流れてきた。

暖房のない初冬の食堂は寒く、外套(がいとつ)を着込んだ姿で震えながら聞こえた曲は心のひだとでもいうべき場所に直接飛び込んできた。「蛍の光」だった。聞けば、その場にいる中国人は皆、この曲を知っているという。中国では「友情は永遠に」という歌として知られているという。

「蛍の光」がスコットランド民謡の「オールド・ラング・サイン」を原曲とした翻訳された唱歌であることからすればこれも不思議は



やまもと たいじ
山本 太一郎

友情は永遠に 昆明への旅

るいは5年ほど前にハイチに暮らしていた時、日本人会主催の忘年会で、皆で歌った「故郷(ふるさと)」を思い出した。

日本から遠く離れたアフリカ、あるいはハイチ。ハイチでは日本人は合わせても10人ほどしかいなかった。10人ほどで合唱した「故郷」。たかだか1年か2年の滞在。望郷の念などないと思っていた。にもかかわらず、不覚にも涙ぐん

故郷 「志をはたして いつの日にか帰らん 山は青き 故郷 水は清き 故郷」

以前、国立民族学博物館の研究員から、音楽やにおいが引き起こす個人の記憶といったものを収集できないかと考えているといった話を聞いたことがある。音楽にそうした記憶を呼び覚ます力があることは間違いない。

考えてみれば、臨沧の向こうはミャンマー。「ピルマの竖琴(たてこと)」の舞台となった地。収容所にいる隊員たちを前に青年僧侶(水島)が奏でる「仰げば尊し」のメロディー。心打たれる隊員を後に、森の中へ去る水島を描いた作品に私たちも共感したものだ。

(長崎大熱帯医学研究所教授)

ない。しかし、これほど心にしみてるとは。10年ほど前、南部アフリカの国ジンバブエに暮らしていた時、あ

だ。理由はわからない。「如何(いか)にいます父母 恙(つつが)なしや友がき 雨に風につけても 思ひ出(い)づる